

わたしを隠してください

この詩を何度か読んで感じるのは、なんと強烈な歌・祈願であろうかということである。具体的にはどのような敵対者に取り囲まれているのかは分からないが、「神よ、悩み訴えるわたしの声をお聞きください」という窮地の中からの叫びは切実であり、心の底から絞り出されたような呼びかけである。第一人称「わたし」の文体によってなされる「救いを求める祈り」が詩編 64 編である。(メイズ)。まず、本文を朗読しよう。私たちの人生も時に過酷であり、理不尽、不条理なものに直面するのではないだろうか？ 四方八方告発者に囲まれ、孤独、孤立を覚えることもあろう。

1. 「わたしを隠してください」(2-3 節)

2 節の先頭の言葉は「聞いてください、神よ」である。何を聞くのか？ 私の叫び声を、黙想における (bešîhî) という語順である。文脈では「黙想」に合わないので、「私の文句、嘆きにおいて」(NRSV は「in my complain」、KJV は「in my prayer」) が良いだろう。青木澄十郎は「我が愁訴の」声に、と翻訳する。口語訳は「わたしが嘆き訴えるとき」と翻訳。

次は、敵の恐れ(恐怖)から、お守りください (tissōr, Qal. Imerf. nāsar, 見張る、保護する、保持する、保存する)、わたしのいのちを、の順である。

そして、「わたしを隠してください」(tastîrênî、Hiph 原因を表わす。Future, with suff. 1 per. Sing, sātar は覆いで覆う、隠す)、邪悪な者の (mārē'im) の秘密裏に計画されている策略 (missōwd) から、また、不正を行う者たちの謀反から (mêrigšat) と祈る。八方塞がりの中で神が隠してくださいという願いには心揺さぶられる。

2. 敵対者の武器 (4-7 節)

敵対者の武器は、剣のように鋭い「舌」であり、毒矢のような苦い「言葉」(dābār) であり、隠れた処に待ち伏せして、矢を射かけてくると形容されている。彼らは、突然の卑怯な振る舞いに悪びれることもない。また、悪事にたけ、共謀して罫を仕掛け、「見抜かれることはない(誰も見ていない)」と豪語する。彼らはいろいろな不正を考案し、「自分たちは抜け目のない図式(計画)を完成させた、内面的想いも人の心も深くて(神を含め)誰にも知られるものか」とうそぶいている。「無垢な人」(tām 5 節) は、むろん、責められる処のない人であるが、道徳的、倫理的な純潔というより、神を信じる人のことであろう。

3. 神が動き、働かれる (8-9 節)

しかし、人はどのようにうそぶくとも、彼らは神が見ておられ、人の心を見抜かれるお方であることを知らない。矢を射かける彼らに対して神が矢を射かけられる。彼らが突然信仰者を襲ったように、神は突然、彼らに応答される。神は悪い者たちの言葉を逆手にとって彼らの破滅の手段とされる。彼らは自滅の道を歩み、自分自身の舌が災いし、躓きのもとになり、人を嘲っていた彼ら自身が侮られるであろうと詩人は思念する。何と、彼らの悪なくみとそれらを砕く神の働きによって神の正しさを証しすることになる！

4. 人は神の働きに気づき、信仰者は喜び祝い、主によって誇る (10-11 節)

神が働かれる (み業) のを知り、あらゆる人は神の働きと行動を認め (宣言し)、目覚めることになる (賢く認識することになる)。そして、信仰者、つまり、主に信頼する義人 (saddîq) は、喜び (yiśmah, Qal, Imperf. 3ms, śāmāh 輝く shine!、元気・喜びを表現する)、心においてまっすぐな人はすべて、主を誇る。ここで「誇る」は「栄化」する = wəyithallū ハレルヤを唱えるというのがヘブライ語の表現である。)。彼らは「主を避けどころとする」は「主に信頼する」 (wəhāsāh bōw, trust in Him) という原語で、まさに、「ヤハウエ」(主)を隠れ家とするのである。